

ポロポロ

田中小実昌



ポロポロ

田中小実昌



中央公論社

ボロボロ

検印廃止
◎一九七九

定価八八〇円

昭和五十四年五月二十日初版
昭和五十四年七月三十日四版

著 者 田中小実昌

発行者 高 梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノハノ七
電話 (五六一) 五九二一
振替東京二一三四

求
口
求
口

目
次

ポロポロ

7

北川はぼくに

35

岩塩の袋

65

魚撃ち

99

鏡の顔

131

寝台の穴

161

大尾のこと

189

装幀 野見山 曉治

ホ
口
ホ
口

ポ

口

ポ

口

石段をあがりきると、すぐにそこに、人が立っていて、ぼくは、おや、とおもった。石段はごろんとぶっとい御影石で、数も四十段ぐらいはあり、その下につづく段々畑のあいだの道をのぼってくるときも、前のほうに、人かげはなかったからだ。

冬のはじめのしらじらした月夜で、なにひとつうごくものがないので、よけい、月の光をしらじらと感じたのかもしれない。

その人はソフトをかぶり、二重まわしを着ており、なにか足もとがおぼつかなかった。ぼくは、その人のよこをとおりすぎるとき、おさきに……といったふうに、かるく頭をさげるようにしたのをおぼえている。

ぼくは、未だに、ひとに挨拶などしたことはない。しかし、あのころは、大人なみの挨拶の真似をするのが、おもしろかったのではないか。そのとき、ぼくはたしか中学四年生だった。

前庭をとおり、ぼくはちょっと考えて、玄関のガラス戸はあけたままにして、靴を脱いであが

った。あとからすぐ、一木さんがくるんだから、とおもったのだ。

石段をあがったところにいた人は、一木さんのはずだった。ぼくの家は、山の中腹に、ひとつだけぼつんと高く建っていた。港町特有の家々の屋根と屋根が段々になってかさなりあった坂道の家なみをぬけると、あとは家もまばらで、やがて、畑のはしの幅五〇センチほどの一直線の細道になり、ぼくの家までは、ちいさな谷をこして、見とおしだった。

このあたりまでくると、昼間、だれかがあるいいても、遠くから目につくほどで、夜、人といきあうことなどは、ほとんどない。

だから、石段の上にいた人は、うちにやってきた一木さんだ、とぼくはおもったのだ。そのころの大人はみんなそうだが、一木さんもソフトをかぶり、冬になると、二重まわしを着ていた。

ぼくの家は玄関から左に廊下があった。ぼくは廊下をすすみ、そのつきあたりの部屋の戸をあけてはいった。

うちでもいちばんちいさな部屋で、じつは、ここは、もとは部屋ではなく、廊下につづいた板の間だった。しかし、そのころは、畳をいれて、たしか、ぼくの勉強部屋になっていた。

部屋には父と母と一木さんがいて、祈っていた。二歳下の妹もいたかもしれない。金曜日の祈禱会の夜だったのだ。

この夜、ストーブを燃していただろうか。福祿ストーブとかいうストーブで、戦艦の艦橋ブリッジのよ

うなりっぱなかたちをしていたが、あまり効率はよくないようだった。瀬戸内海のこの軍港町では、ストーブなどある家庭は、ほんとにめずらしく、つまりは実用品ではなかったせいもあるだろう。

この夜、ストーブを燃していたかどうか、はっきりしないのは、まだ冬のはじめで、いちばん寒いころではなく、また、そのとき、ぼくが中学の四年生だったとしたら、昭和十六年の暮れの冬で、もう中国大陆での戦争は長く、一般家庭では石炭を手に入れるのがむづかしかつたのではないかとおもうからだ。

しかし、乏しい石炭を金曜日の祈禱会の夜のためにとっておいて、ストーブのあるちいさな部屋に集ったということも考えられる。

ぼくがその部屋にはいつていったとき、父と母と一木さんが祈っていたと言ったが、父が牧師だったうちの教会では、天にまします我等の父よ……みたいな祈りの言葉は言わない。

みんな、言葉にはならないことを、さけんだり、つぶやいたりしてるのだ。それは、異言^{いげん}というようなものだろう。使徒行伝の二章にも、異言という訳語は見えないが、そういったことが書いてある。使徒たちが、自分がいったこともない遠い国の言語でかたりだしたというのだ。

こんなふうに、記されたことでは、異言には、こういう意味があったというような場合が、それこそ記されてるが、実際には、異言は、口ばしってる本人にも他人にも、わけのわからないの

がふつうではないか。うちの教会のひとは、異言という言葉さえもつかわなかった。ただ、ポロポロ、やってるのだ。

このポロポロは、いわば、一木さんの口ぐせ(?)だった。ポロポロのもと、使徒パウロだろう。しかし、一木さんは、パウロ先生の霊に、いつもゆさぶられていたかもしれないけど、これは、やはり、祈りのとき、ぼろぼろ、と一木さんの口からこぼれたものにちがいない。

イエスは、十字架にかけられる前の夜、ゲッセマネ(ルカ福音書ではオリブ山)というところで、切に祈った、と聖書には書いてある。だが、そのとき、イエスは日常はなしていたらしいアラム語で祈りの言葉、をのべたのでもなく、またユダヤの祈禱用の言葉、を口にしたのでもなくて、ただ、ポロポロやっていたのではないか。

ゲッセマネの園で、イエスが言葉で祈っていたなど、考えられない。だいたい、だれかが祈ってる言葉をきくと、ちょっぴり自己反省をし、そして、自らの徳行を誇り、あとは神にたいする要求ばかりだ。

ルカ福音書二十二章によると、その夜、オリブ山でイエスはこう祈ったという。「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いでなく、みこころが成るようにしてください」

みこころならば……みこころが成るようにしてください、というのは、神への要求でもなければ

ば、自分の願いでもない。ただ、神をさんびさせられているのだろう。言葉は、自分の思いをのべることしかできない。イエスは、自分の思いをのべているのではないのだ。

オリブ山（ゲッセマネ）で、イエスはこう祈った、と聖書には記されているが、実際、そのとき、イエスの口からでた音は、言葉ではなく、ただのポロポロだったのだろう。

ところが、世間では、いや、キリスト教の教会の人たちも、イエスは、それこそ世間の言葉で祈ったとおもいこんでるのが、おかしい。

一木さんはポロポロだが、さんびのあいだじゅう、ハ、ハ、ハ……とわらってるひともいた。また、おなじハ、ハ、ハ……でも、わらってるのではなく、泣いてるようなひともいた。

そんなふうに、みんなあつまって、ギャアギャアやってるわけだから、世間ではきちがいの集団だとおもったにちがいない。

まだ町なかの教会にいたころ、このポロポロ、ギャアギャアがはじまったときは、なにがおきたのか、とヤジ馬が教会の窓にいったかつて、のぞきこもうとした。

そのあとで、山の中腹の木立のなかに、どこの派にも属さない、自分たちだけの教会をつくったのだが、教会でポロポロやるだけでなく、たとえば、父とぼくとが町の通りをあるいていて、むこうから、一木さんがあるいてきたりすると、道ばたで立ちどまり、ポロポロやりだす。停車場の雑踏のあいだで、教会の人どうしがあったときなどもそうで、子供のぼくは恥ずかしかった。

これは、ポロポロを見せびらかし、つまりはデモンストレーションをしてるのではなく、からだ
がふるえ、涙がでて、もうどうにもとまらなく、ポロポロはじまってしまうのだろう。

しかし、ぼくは地元の中学の入試に落ちて、バプテスト派のミッション・スクールにはいった
が、ここでの日曜学校や祈禱会でのお祈りも、きいてるだけで恥ずかしかった。

ともかく、そんなふうなので、世間の人があきれてるのはもちろん、ほかの教会の信者たちも、
キリスト教の恥さらしとおもっていたにちがいない。

だいいち、うちのは教会とは言っても、山の中腹の木立のなかの日本家で、屋根にもどこに
も、キリスト教会のシンボルみたいになっている十字架ひとつなく、あんなものは、キリスト教
の教会のうちにははまらない、とほかの教会の信者たちはケイベツしていただろう。

十字架ひとつない教会のくせに、その教会の者が、通りで顔をあわせると、ジュウジカ、ジュ
ウジカ、ジュウジカ、十字架の血だ！　なんてわめきあっているのだから、胸に十字架のブロー
チをさげた敬虔なクリスチャンたちは、さぞいやだったのではないか。

廊下のつきあたりの部屋の戸をあけると、父と母と一木さんがいてポロポロやっていたのは、
前にも言ったが、これはおかしなことだった。